資料１

**前回までの意見を踏まえ今回修正した内容と今後整理すべき事項について**

**１．前回までのWGにおける意見を踏まえ、今回修正した内容**

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 前回までのWGでの意見 | 修正内容 |
| ツール開発目的 | ・高次脳機能障がいの方々を受け入れる地域の事業所はまだまだ不足。支援が困難な層を含め、この支援連携ツールを活用してどのように受け皿の拡大につなげていくのか？ | 　ツール開発の目的として、①個別性の高い高次脳機能障がいの状態像を共通指標化することで、行政を含む支援者が見落としなく障がいの存在を把握し、特に支援が困難な層では支援者がどのように支援すればいいか苦慮され、また、それに対応できる事業所も少ない現状に鑑み、②障がいの程度に応じそれぞれの事業所が行っている支援の工夫を共有し、支援ノウハウを蓄積するための手段とする旨を、明記しました。⇒資料２　２参照 |
| 活用方法 | ・ツールの入手方法、管理方法等、支援連携ツールの使い方（活用の流れ）がよくわからない。 | 　ツール活用の流れ、ツールの形態について、明記しました。⇒資料２　６参照　現時点での案では、ご本人がツールを持って支援者に記入を依頼する形式としているが、個人情報の収集、他の支援者への情報提供など個人情報に関わる点については今後整理が必要と考えている。 |
| 活用利点 | ・ご本人・ご家族にも、支援者である医療機関がこの支援連携ツールを活用したいと思ってもらわないことには意味がない。活用の「益」をPRする必要がある。 | 　ツール活用によって得られる効果、ご本人・ご家族、支援機関ごとの活用のメリットを明記しました。⇒資料２　５参照 |
| 医療情報 | ・医療機関においては、既に病院ごとに作成した「診療情報提供書」等の既存の様式があるため、それでわかれば改めて様式に記入する必要はないのではないか。・多くの場合、急性期・回復期からの退院後、地域に戻ってから障がいに気づくため、地域のかかりつけ医による確定診断や地域の障がい福祉サービス事業所等が必要な情報を得ることを容易にする必要がある。 | 　「診療情報提供書」等、既存の様式で必要な情報が記載されていれば、各種検査結果、画像、服薬情報等も、それを活用することで可能である旨、再度、明確化しました。また、医療情報については、急性期・回復期退院後、地域の医療機関が確定診断をしやすくし、加えて、地域の障がい福祉サービス事業所においても、受傷初期に関わった医療機関の情報をご本人・ご家族に取得していただくよう促すためのものである旨も、明記しました。⇒資料２　４参照 |
| 生活情報 | ・ご本人がこのツールを使いたいと思えるよう、「困りごと」等を支援者に伝えるようなSOSカード的な利用も考えられる。 | 　「生活情報」の様式により、ご本人の希望する将来像やストレングスを把握するためのツールであると考えていますが、より、「ご本人の困りごと」を支援者に伝えることに重点を置く旨、明記しました。⇒資料２　４参照 |
| アセスメントツール | ・アセスメントツールは標準化されたものでないため、詳細であればあるほど、医療機関や障がい福祉サービス事業所の参画のハードルがあがる。・アセスメントについては、本人の認識と支援者からみた客観的な評価の乖離の有無を把握することも有意義。支援者は、それをもとにご本人に対する障がいの程度の説明や、支援方法を組立に活用することが大事。 | 　ご本人・ご家族及び支援者の記載のしやすさに力点を置き、様式を修正しました。　また、この様式をご本人と支援者の両方が記載することにより、ご本人と支援者の評価の乖離の有無を把握することにも活用できるツールであること、また、現在、支援者が行っている支援内容や、こ本人が努力されている代償手段についても共有するためのツールである旨、明記しました。⇒資料２　４参照 |